

成績、人望、家柄。この大学という箱庭において、俺の立ち位置は完璧に舗装されていた。

周囲の連中が俺をどう見ているかなんて、わざわざ確認するまでもない。羨望と、少しの嫉妬、そして逆らえないほどのカリスマ性。それがカーストの頂点に君臨する赤羽虎也という人間に相応しい報酬だ。講義に出れば誰かが席を空け、学食を歩けば自然と道が開く。

『無敵の陽キャ、完璧な支配者』

周りから崇められている俺は今、夕闇が忍び寄る無人のラウンジで、指先を血が滲むほど握りしめながら、無様に鞆をひっくり返していた。

（ねえ……！ 嘘だろ、どこを探しても見当たらねえ……っ！）

心臓が耳元でうるさく脈打ち、胃の底からせり上がるような不快な熱が全身に広がる。

ブランド物の財布も、並んで手に入れた最新のデバイスも、今の俺にとってはただの重石でしかない。俺が必死に探しているのは、肌身離さず持ち歩き、命よりも嚴重に隠し続けてきた一冊の『ノート』だけだった。

それは、男でありながら女の身体の器官を持つ、カントボーイとしての俺の、『秘密』を綴った記録だ。

（あんな、あんな最悪な書き込みを、もし誰かに拾われて見られでもしたら……っ！）

全身が総毛立つような嫌悪感が走る。

ノートには、俺が男の俺をどう開発したいか、どんな玩具で、どれほど無惨に中をかき回されたいかという、ドロドロの妄想がびっしりと書き込まれているのだ。

お気に入りのページには、わざわざ赤いペンで『連続絶頂』だの、『中出し強制』、『潮吹き絶頂』、『公共の場での絶頂』、『絶頂の禁止』なんて、見

るに堪えない願望が躍っている。

（よりによって、よりによってだ……！ 誰かに見られたら、俺の人生は一瞬で終わる。俺を慕ってくる連中も、俺に媚びる奴らも、全員が手のひらを返して俺を指差して笑うんだ……ッ！）

焦燥感で視界がチカチカと明滅する。半ばパニックになりながら、ぶちまけた荷物を鞆に叩き込もうとした、その時だった。

「あの、さ、探し物、してるんだよね？ ……あ、赤羽くん……」

不意に背後からかけられた、湿り気を帯びた吃音。俺の心臓は、嫌な音を立てて跳ね上がった。全身に鳥肌が立ち、指先の感覚がすうっと消えていく。

「だ、誰かが見たら、困ると思って。……僕が、持ってたただけなんだ」

確か、名前は大森心大。

高い身長に幅のある肩幅でスタイルは悪くないくせに、猫背気味な陰気な人間。いつも後方の席で、長い前髪の間から粘つく視線で誰かを観察しているような、影の薄い男。

普段なら絶対に関わる事のない人間。

だけれど、今、俺の全存在を握っているのは、間違いなくこの男だった。

「お前……っ！ その、ノート！ 何で、お前が……っ！」

その長い指先には、俺の『秘密のノート』が掲げられていた。心大は、俺のノートを、大事な宝物でも扱う手つきで胸元に抱きしめた。

「こ、これ、拾ったんだ」

「ふざけんな、返せよ！ それは俺のだ！」

「あ、ち、違うよ。赤羽くん、落としてた、から……。誰かに見られたら、大変でしょ？ だ、だから

僕が、安全な場所に避難させてただけなんだ」

「……お前、ノートの中は見たのかよ……」

心大は一瞬、戸惑ったように視線を泳がせた。だけれど、長い前髪の奥にある瞳が、ふとした瞬間にねっとりとした熱を帯びる。

「……うん、読んじゃった。隅から、隅まで。……赤羽くん、あんなこと、毎日考えてたんだね……♡」

「っ、ふざけんな……！」

（見られた……。読まれたんだ……。っ！全部。俺の、あの本音まで、全部……。っ！）

ノートから俺が夜な夜な書き込んでいた『絶頂の禁止』という文字が、残酷なほど鮮明に脳裏に蘇る。俺の顔から、一気に血の気が引いていく。

よりによって、こんなカースト底辺のゴミに、俺の聖域を土足で踏み荒らされるなんて。殺してやりたい、今すぐ――。

「返せって言ってんだろ……っ！ それは俺の……俺のプライバシーだ！ お前みたいなキモい奴が持っていていいもんじゃねえんだよ！」

「も、もちろん返すよ。で、でも……ずっと一人で、我慢してたんだね。……こんなに、身体が痛いくらいにうずいてるのに。この『中をかき回されたい』っていう書き込み。……す、すごく切実だと思ったよ……♡ 君のこと、今一番わかってるのは……僕だね」

心大が、一步、また一步と、俺の逃げ場を奪うように距離を詰めてくる。いつもは猫背で下を向いているような男が、今はこの距離でもまっすぐに俺を凝視している。

「よ、寄るな！ ……その薄汚いツラをこれ以上近づけるな！」

後ずさりしたが、俺の背中はずぐに冷たい窓ガラスに当たってしまった。

夕陽が彼の背後から差し込んで、心大の表情を不気味な影で覆い隠した。その逆光の中で、彼の長い指がノートのページをゆっくりと捲った。

「12ページの『拡張の記録』……。あ、あんなに頑張って広げたんだね。……教授の声を聞きながら、な、ナカが熱くなっちゃう、って。それなら、僕が……助けてあげられるよ。赤羽くんの望み、全部……叶えてあげる……♡」

「っ、見るな！ 黙れ……返せっ、殺すぞッ！」

必死にノートを奪おうと手を伸ばしたが、心大はそれをひょいと避けた。そして、空いた方の手で俺の手首を、驚くほど冷徹な力で掴み上げる。

（っ、力が……強い……。振り払えない……っ！）

華奢に見えたその腕には、抵抗を許さない冷たい意志が宿っていた。俺がどんなに叫んでも、あいつの瞳は揺るがない。それどころか、俺が憤るほど、

心大の表情には歪な満足感が広がっていく。

「もちろん、ノート返すよ。それに、誰にも言わない……。だから、条件……き、聞いてくれる……？」

心大の顔が、耳元まで近づいてくる。湿った吐息が肌に触れて、俺はゾクゾクとした、生理的な嫌悪感が込み上げる。

「こ、これ返すから。だから、君がノートに書いた理想のシチュエーションを……ひ、一つずつ、俺と一緒に実践しよう、よ？ お、俺も、て、手伝うからさ……♡」

「なっ！ 狂ってんのか……っ！ そんなこと、できるわけねえだろ……ッ！」

「で、でも、赤羽くんは、実はカントボーイで、それで、男の人に色々、されたいんだよね？ ぼ、僕がそれ全部、手伝うよ……！」

心大は片手でスマホを操作して保存された画像を

見せてきた。そこには、俺の字で書かれた『無理やり中出し』『絶頂の禁止』などという文字が、残酷なほど鮮明に写し出されている。

「……クソッ！」

目の前がチカチカとする。ノートを奪い返したところで、もう意味がない。この陰湿な男のスマホの中には、俺の醜い中身がデジタルデータとして完全に保存されている。

バックアップは？ クラウドに同期してたら？ 一箇所消させたところで、こいつが予備を持っていない保証なんてどこにもない。

（ふざけんなよ……ッ！）

心大の顔を改めて見据える。

こういう、普段何に価値を置いて生きているのかわからない『陰キャ』は厄介だ。

失うものがない奴には、ブレーキがない。俺の社

会的地位なんて、やろうと思えば一瞬で壊せるだろう。

（何をやらすかわからない……。逆らって、こいつの機嫌を損ねたら……。その瞬間に俺の人生は終わるかもしれない……。ッ！）

「……。っ、わかったよ！ やればいいんだろ、やれば……。っ！」

俺は屈辱に震える声で、絞り出すように答えた。心大は「よ、よかった。う、嬉しい……。♡」と、満足そうに目を細め、俺の手首を離した。

「じゃあ、明日からやろう、ね。あ、あの空き講義室で待ってるね。き、来てくれる、よね？」

「……。ああ、わかったよ」

俺は力なく俯いた。だが、心の奥では消えない殺意が燃え盛っている。

（今は従っておいてやる。だが、見てろ。お前みたいなゴミに、俺がいつまでも屈していると思うなよ！ 必ず隙を見てノートもデータも奪い返して、お前を地獄の底まで叩き落としてやる。……絶対に、タダじゃ済まさねえからな……ッ！）

一刻も早くこの場を立ち去ろうとしたその時だ。不意に、心大が、猫背のまま俺の行く手を塞ぐように一歩踏み出してきた。高身長なその体が大きな影となり、俺を冷たい静寂の中に閉じ込める。

心大は所在なげに指先を弄りながら、それでいて、俺から一秒たりとも視線を外そうとはしなかった。

「じゃ、じゃあ、今日は予習、ってことで……」

「よ、予習って……。あ、明日から……じゃねえのかよ……っ？」

（ふざけんな。こいつ、目がさっきより暗くて……底が見えねえ。今すぐ殴り飛ばして逃げなきゃいけないのに、身体が、動かねえ……っ）

「あ、明日いきなり本番じゃ、き、緊張しちゃう、

と思って……。だから、お互いに、身体を慣らしておこう♡」

「っ、ふざけるな……！」

「……いいから。こ、こっちに来て……♡」

心大は俺の返事も待たずに、俺の手首を掴み、無人の講義室の奥へと引きずり込んだ。ガチャン、と重々しく鍵が閉まる音が、俺の退路を断つ合図のように響いた。

「そこの机にす、座って。ノ、ノートにあった、秘密のことしよう……？」

「っ……！ ああ、わかったよ……っ」

こいつの機嫌を損ねたら、あのノートの内容が晒されるかもしれない。

その最悪の結末を避けるために、俺は煮え繰り返るような屈辱を飲み込み、冷たい机に腰を下ろした。心大が俺の両足の間に割り込むように立ちはだかり、前髪の隙間から、照れたような笑みを浮かべる。

「赤羽くん、し、下着、見るね……♡」

「クソっ、キモいんだよ……っ！」

「ご、ごめんね」

そう言いながらも、心大の指が、俺のズボンのベルトに掛かり、ゆっくりとチャックを下ろしていく。

心大の呼吸は隠しきれないほどに荒く、上気した顔は耳の付け根まで真っ赤に染まっている。オドオドした態度の奥で、隠しきれない興奮がじわじわ滲み出ているのが、近すぎる距離から伝わってきて吐き気がした。

「あ、し、白なんだ。き、綺麗な赤羽くんには、ぴ、ぴったりだね……」

「……見んな。……殺すぞ、マジで……っ」

（屈辱だ。こんなゴミみたいな奴に、俺のこの身体を……まじまじと見られてる）

「で、でも、『連続絶頂』とか、の、ノートに書いてた。……ば、僕も頑張る、から。足、広げて……？」

心大は強引に俺の膝を左右に割り、カントボーイとしての俺のおまんこが隠された股ぐらを剥き出しにした。完璧な陽キャとして振る舞う俺が選んだ、何の飾りもないシンプルな下着。それが、あいつのねっとりとした視線に晒されていると思うだけで、腹の奥がじりじりと焼けるように熱くなる。

「ん、や……あッ♡」

心大の手が、俺の太ももを執拗に撫で上げ、付け根の際どいところまで侵入してくる。

「え？ も、もしかして。もう……こ、興奮してるの……？」

吃りながら、心大が俺を覗き込む。あいつの手が、下着越しに俺のおまんこをまさぐった。俺が怒りと羞恥で硬直しているのをいいことに、慈しむような手つきで触れてくる。

さすさす♡ さすさすさすさすさす♡

「や、やめろっ、ンッ……ああ♡」

「あ、ごめん。触ってるの、ク、クリトリスじゃなくて、おまんこだもんね。……ご、ごめん。でも、段階、というか。最初はおまんこから、触った方がいいかと思って」

「ちが……っ、て……ッあ♡はぁん……♡」

心大は淡々と、だが確実に俺の下半身をまさぐり続ける。「ふざけるな」と怒鳴りたいのに、長い指が動くたびに声が熱を帯び、下着がじっとりと湿っていくのがわかる。

「わ。な、なんか、お、おっきなシミ……できてる……！」

「んんっ♡♡」

「……も、もしかして、ぬ、濡れてる……？」

「ちがっ……！♡」

心大の長い指が、下着の縁を強引に横にずらした。冷たい空気に触れた俺のおまんこが、恥辱と期待で